

西洋の発見

— 幕末・維新期の遣外使節と留学生達 —



竹内保徳
※1



池田長発
※1



柴田剛中
※1



徳川昭武
※2



岩倉具視
※2

肖像写真
※1 東京大学史料編纂所所蔵
(東京大学総合図書館ホームページより転載)
※2 国立国会図書館所蔵

展示会 平成18年11月10日(金)～24日(金)日曜日は除く 名古屋大学中央図書館展示室

講演会 11月16日(木)13:30～14:30(会場 名古屋大学中央図書館5階多目的室)

講師・演題 神保文夫(名古屋大学法学研究科教授)「幕末・明治の遣外使節と西欧近代法知識の移入」

主催 名古屋大学附属図書館・同研究開発室

共催 名古屋大学大学院法学研究科・同経済学研究科

後援 駐日欧州委員会代表部、在日オーストリア大使館

はじめに

明治4（1871）年11月12日（旧暦）に横浜を出航し、米、英、仏、ベルギー、オランダ、ドイツなど13か国を1年半余をかけて視察した岩倉遣欧使節団は、産業革命後で近代化真只中の西洋諸国の政治、軍事、産業、文化、生活などあらゆるものを見聞し、情報を収集して持ち帰りました。江戸時代の長い鎖国政策から寢覚め、欧米列強の政治的経済的な攻勢から、開国後の日本を独立国家として維持していくために、早急な近代国家への脱皮を迫られていた明治維新政府の、この使節団を送った大いなる意欲と決断力には、現代から見れば驚嘆すべきものがあります。

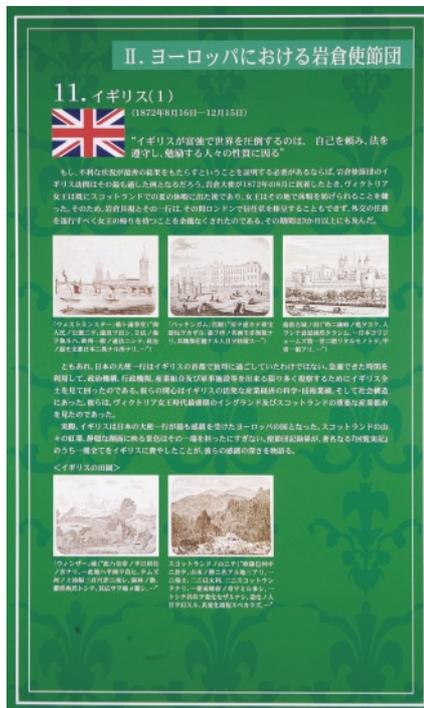
また、この明治遣欧使節派遣に先立つ10数年の間にも、徳川幕府が数次に亘って欧米に使節団や留学生団を送り、西洋諸国を知りその先進文化を取り入れようとしてきた実績があり、延べ数百名にも及ぶこれらの渡航者や異国への漂流民、密航者などの持ち帰った情報や収集物が、明治の近代化に繋がっていったことも大いに評価されるべきことです。

今年も、日本とヨーロッパ連合（EU:European Union）との交流事業のひとつとして、各地のEDC（EU資料センター）等で展示会や講演会が開催されていますが、本学もその一環として、日本と西洋諸国が歴史的な出会いをした江戸末期から明治初頭の遣欧使節や留学生に関わる史料展示会を開催することにいたしました。本学の展示会では、明治4年の岩倉遣欧使節団が訪問した国々について『米欧回覧実記』から作成された紹介パネルを軸に、この時期に欧米視察に参加し、あるいは留学した日本人の残した記録や日記類の中から、本学が所蔵するものなどを展示し、約130～150年前の日本人がどのように西欧諸国を見、現在の日本の礎を築いたかを考えます。

展示史料1：「日本のヨーロッパ発見」明治岩倉遣欧使節団の見たもの（パネル）



パネル7 特命全権大使と4人の副使



パネル11 イギリス(1)

今回展示のこれらのパネル資料は、ペーター・パンツァー、ボン大学教授の監修の下に、駐日欧州委員会代表部とEUの各国大使館、国立国会図書館及び久米美術館等の協力で作成され、国会図書館を始め全国の大学図書館などで巡回展示されているもの。本学展示もその巡回展に参加している。

展示パネルは、岩倉全権大使の随行人員久米邦武の『特命全権大使米欧回覧実記』（久米邦武編 博聞社 1878.10）を主材料とし、豊富な銅版画などの史料を配し、さらにEU各国の史料などで構成され、25枚のパネルとなっている。

本学の展示会では、会場の関係で一部のパネルを縮小したものや、展示していないものもある。

「I. 最初の出会い」と題した5枚のパネルは、幕末の日本人が抱いていた西洋人観や、オランダを介した西洋との交流を紹介し、欧米各国との修好通商条約締結、江戸幕府の遣欧使節団などの日本外交史を説明している。

「II. ヨーロッパにおける岩倉使節団」と題したパネルは、米国での条約改正交渉中止後に、西欧社会の視察に

目的を切り替えた使節団の、英国をはじめとした各国での視察内容について、『特命全権大使米欧回覧実記』などを引用し、多数の画像資料などを配して詳細に説明している。

これらの歴史のできごとについては、最近改めて関心と呼んでいるが、この展示を機会に、幕末・明治初期の日本人の歴史的偉業について、一度思いを巡らしていただきたい。

展示史料2：江戸時代末期の日本人の海外認識

1. 『環海紀聞』大槻茂質、志村弘強編著 [書写地不明] 文化4 (1807) (写)



仙台藩領石巻の廻船若宮丸は、寛政5 (1793) 年奥州石巻港を出港後、アリューシャン列島に漂着し、10年余の流浪の後、船頭の津太夫ら4名は、文化元 (1804) 年に第二回遣日修好使節のニコライ・レザノフに伴われ、長崎へ送還された。大槻茂質 (後の名は、大槻玄沢) らは、江戸において仙台藩の命により、彼らのシベリア、ロシアの見聞記録を口述から『環海異聞』16巻 (志村弘強と共編) に纏めた。『環海紀聞』は、多数あるその写本のひとつで、書名は異なるが内容は『環海異聞』とほぼ同じ。

仙

2. 『海外異聞』 [書写地不明] [書写年不明] (写)



天保12 (1841) 年に太平洋岸を奥州に向け航行中に漂流した兵庫の永住丸の乗組員13名は、スペイン船に救助され、カリフォルニアに到達した。その後、天保14 (1843) 年に漂流民のうち岡廻り役初太郎が清国経由で長崎に送還され阿波藩に引き取られた。阿波藩では、漂流の顛末を儒

臣前川文蔵が聞き取りを行い、酒井順蔵が『亜墨新話』に纏めた。『海外異聞』という別書名でも刊行されている。

展示品は、『亜墨新話』5巻5冊のうち、巻3の「地形」の部分までを1冊に纏めた写本であり、図は模写若しくはいずれかの書籍から取ったものが貼り込んである。題簽は『墨^レ亜利加聞書』。

3. 『新訂地球万国方圖』 [出版地不明] [出版者不明] 嘉永6 (1853)



近世前期、ヨーロッパの大航海時代を通じて獲得された地理的知識を取り入れた万国図が作成された。東洋では、イエズス会の宣教師マテオ・リッチが、16世紀末頃のヨーロッパ製世界図など

をもとに漢訳したものを1602年に北京で刊行した。後にそれらが日本にもたらされ、以後日本でも世界図が多数刊行された。この万国方図は、メルカトル図法による世界全図としても現代地図にかなり近いものとなっており、大陸配置上でも、西洋と東洋との位置を入れ替えて極東を真中にした、現代でも馴染み深い日本向けの世界図となっている。

4. 『海外治亂繚像人物小傳』 [出版地不明] 萬邦楼 嘉永6 (1853)

海外の国王や武人など有名人物小伝を挿絵入りで紹介するもので、18世紀半ばの日本で集めえた外国資料をもとに書き表したものである。この類の書物は、多数流布したらしくかなり残っている。別書名「海外人物小傳」。

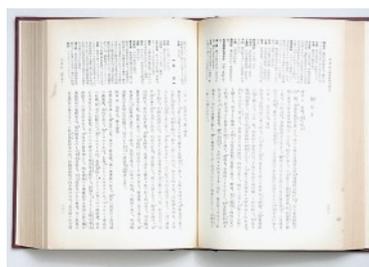
資料No.	渡航者	渡航歴	史料名	所蔵
1	石巻漂流民	シベリア・ロシア・世界一周	『環海紀聞』大槻茂質、志村弘強編著 [書写地不明] 文化4 (1807) (写) 10冊 28cm (和装)	中央準貴 290.1 O 神宮皇學館文庫
1-1	同上	同上	『環海異聞』志村弘強、大槻玄沢 [編著] 『江戸漂流記総集: 石井研堂これくしょん』第6巻 石井研堂 [編] 山下恒夫再編 日本評論社 1993.7 所収 p.65-602 20cm	中央図 290.9 I 6
2	兵庫漂流民	漂流-米国	『海外異聞』 [書写地不明] [書写年不明] (写) 38丁 (絵入り) 24cm (和装)	中央準貴 290.1 Ka 神宮皇學館文庫
2-1	同上	同上	『亜墨新話』 『江戸漂流記総集: 石井研堂これくしょん』第4巻 石井研堂 [編] 山下恒夫再編 日本評論社 1992.9 所収 p.261-410 20cm	中央図 290.9 I
3			『新訂地球万国方圖』 [出版地不明] [出版者不明] 嘉永6 (1853) 地図1舗 80×127cm (折りたたみ25cm)	中央準貴 290.38 Ti 岡谷文庫
4			『海外治亂繚像人物小傳』 [出版地不明] 萬邦楼 嘉永6 (1853) 5冊 26cm (和装)	中央準貴 283 Ka 岡谷文庫

展示史料3：幕末の遣外使節団・留学生の記録

5. 『遣米使日記』村垣淡路守範正著 阿部隆一編 文學社 1943.11

村垣範正 (1813-1883) は、万延元 (1860) 年、遣米使節団の副使として渡米する。この日記は、自筆本の『航海日記』を明治31 (1898) 年に東陽堂が『遣米使日記』として翻刻したもので、本書は東陽堂本を底本として、日米協会本 (1918年) と日本史籍協会本 (1928年) を照合して出版したもの。命を受けた安政6 (1859) 年9月13日から、帰国して加増を賜る万延元 (1860) 年12月1日までを詳細に綴った日記。

6. 「仏英行」 [柴田剛中著] 岩波書店 1974.12



柴田剛中 (1823-1877) は、慶応元 (1865) 年から翌年にかけて幕府が派遣した遣仏使節団の特命理事官である。本書は、剛中の日記のうち、柴田なか氏所蔵の自筆本『柴田剛中日載七・八』に収められているものの翻刻で、横浜港を出

発する5月27日から、帰国する翌1月26日まで記載されている。

ドナルド・キーンは、『続百代の過客 上 日記にみる日本人』(1988年)の中で、一番面白みのない日記であり、柴田は日記作者の中でも最も人間的魅力に乏しい人物であること、自分の使命を極度に意識していて、直接関わりのないことには、一切関心を払っていないこと、その記述の細かさは呆れるばかりであったというような感想を書いている。

7. 『尾蠅欧行漫録』 市川 渡著 [書写地不明] 文久3(1862) 序(写)



市川 渡(1824-?)、号は清流。三重県志摩の出身とも言われる。出府後、幕臣岩瀬忠震の家臣となり、文久元(1861)年、竹内下野守保徳を正使とする幕府の遣欧使節に、松平石見守の従者として参加。

『尾蠅欧行漫録』は、西洋諸国の近代化の実情を記録したものとしては高く評価される。英国の外交官アーネスト・サトウが英訳したものが英国の雑誌に掲載され、また平成4年には、楠家重敏がアーネスト・サトウの英訳から日本語現代語訳にして出版した。

8. 「和蘭滞在懐中日記」[赤松大三郎著] 雄松堂出版 1984.12



赤松大三郎(1848-1900)は、後の名を則良といい、万延元(1860)年咸臨丸で渡米しているが、文久2(1862)年には、造船学習得のため、幕府からオランダへ留学生として派遣される。全15名の中でも一番記録を残しており、「和蘭滞在懐中日記」の他にも「航海日記」と「留学日記」(いずれも『幕末和蘭留學關係史料集成』雄松堂書店 1982.2 所収)があるが、「和蘭滞在懐中日記」は、慶応元(1865)年4月

まで記載された「留学日記」の続きで、明治元(1868)年までが、オランダ製の日記帳4冊に、オランダ語や挿絵も、ペンを使って書かれている。オリジナルは国立国会図書館憲政資料室所蔵。

9. 「航海日記」[岩松太郎著] 日本史籍協會 1930.1

岩松太郎(生没年不詳)は、文久3(1863)年、池田筑後守長発の遣使使節団に、副使の河津伊豆守の従者として参加。万延元(1860)年から始まった幕末期の幕府派遣の遣外使節団の中でも記録史料が少なく、この「航海日記」も帰航の途中で一部失ったという。

記述は、出発前の買い物を書いた文久3(1863)年12月14日から、帰路インド・ニコバル諸島を過ぎる元治元(1864)年6月23日まで記載されている。

10. 「英航日録」「滯英日誌抄」[川路寛堂著] 法政大学出版局 1953.7

川路寛堂(1844-1927)の父は江戸末期の幕臣、川路聖謨。寛堂は、慶応2(1866)年に、中村正直とともに幕府英国留学生14人のうちの取締として参加。「英航日録」「滯英日誌抄」は、川路家に伝わった寛堂自筆の「英航日録」から息子の柳虹が抄出したもので、慶応元(1865)年9月に英国留学を命じられたときから、明治元(1868)年に帰国するまでが書かれている。

11. 「航西日記」[渋沢栄一著] 日本史籍協會 1928.1

渋沢栄一(1840-1931)は、慶応3(1867)年のパリ万国博覧会に参加し、徳川民部大輔昭武遣使使節団の会計・書記担当の随員である。この日記は、同じく『澁澤栄一滞佛日記』所収の「巴里御在館日記」「御巡國日録」とともに、在仏中の日記であるが、本書の中ではパリ万博会場について、詳しく述べている。

資料No.	渡航者	渡航歴	史料名	所蔵
5	村垣範正	万延元年遣米使節団副使	「遣米使日記」村垣淡路守範正著 阿部隆一編 文學社 1943.11 255p 写真16枚 18cm	法 T210.5953 Mu 瀧川文庫
5-1			「万延元年遣米使節団関係外国新聞記事」『万延元年遣米使節資料集成 6』日米修好通商百年記念行事運営会編 風間書房 1961.9 所収 p.1-327 22cm	中央図 210.58 N
6	柴田剛中	文久元年使節団従者及び慶応元年遣使使節団正使	「仏英行」[柴田剛中著]『西洋見聞集』沼田次郎、松沢弘陽校注 岩波書店 1974.12(日本思想大系 66)所収 p.[261]-476 22cm	中央図 121.08 N
7	市川 渡	文久元年遣欧使節団(従者)	『尾蠅欧行漫録』市川 渡著 [書写地不明] 文久3(1862)序(写) 3冊 26cm(和装)	中央準貴 293.09 I 岡谷文庫
7-1			A Confused Account to a Trip to Europe, Like a Fly on a Horse's Tail. (The Chinese and Japanese Repository, 1865.7-12. The Japan Times, 1865.9.15-1866.3.9)	
7-2			『官板海外新聞別集 -日本使節巡行記事-』洋書調所訳 東都 老自館(萬屋兵四郎) 文久2(1862) 28, 18丁 19cm(和装)	中央準貴 071 Ka 岡谷文庫
8	赤松大三郎	文久2年幕府オランダ留学生	「和蘭滞在懐中日記」[赤松大三郎著]『続幕末和蘭留學關係史料集成』雄松堂出版 1984.12(日蘭學會學術叢書 第4)所収 p.25-196 23cm	中央学 210.59 B
9	岩松太郎	文久3年遣使使節団(従者)	「航海日記」[岩松太郎著]『遣外使節日記纂輯 第三』大塚武松編輯 日本史籍協會 1930.1 所収 p.[389]-480 23cm	中央図 210.58 N
10	川路寛堂	慶応2年幕府英国留学生	「英航日録」「滯英日誌抄」[川路寛堂著]『黒船記一開国史話一』川路柳虹著 法政大学出版局 1953.7 所収 p.159-192 21cm	法 209.2 K179
11	渋沢栄一	慶応3年遣使使節団(随員)	「航西日記」[渋沢栄一著]『澁澤栄一滞佛日記』大塚武松編輯 日本史籍協會 1928.1 所収 p.1-204 23cm	中央図 210.58 N
11-1		慶応3年遣使使節団	「民部大輔、大君の弟(徳川昭武万博協会訪問記事 1866.1.20)」『イリュストラシオン』日本関係記事集:1843-1905 第1巻 横浜開港資料館編 1986.3 所収 p.59 37cm	中央図 210.58 Y

展示史料4：条約・近代法体系の導入・整備

12. 『亜墨利加国條約並税則』[菊屋幸三郎] 安政6 (1859)
『阿蘭陀國條約並税則』[菊屋幸三郎] 安政6 (1859)
『魯西亜國條約並税則』[菊屋幸三郎] 安政6 (1859)
『英吉利國條約並税則』[菊屋幸三郎] 安政6 (1859)
『佛蘭西國條約並税則』[菊屋幸三郎] 安政6 (1859)

安政5 (1858)年、幕府がアメリカ、オランダ、ロシア、イギリス、フランスと締結した修好通商条約で、「安政五箇国条約」と総称される。居留地を設定し、領事裁判権、関税率協定制、片務的最恵国条項を認めるなど日本にとって一方的に不利な内容の不平等条約であり、とりわけ領事裁判権を認めたことはいわば非文明国たる象徴でもあったから、条約改正を実現して西洋列強と対等の国際的地位に立つことが明治を通じて朝野の課題であり、悲願であった。

13. 『立憲政體略』加藤弘蔵著 紀伊國屋源兵衛 慶應4小引 (1868)

啓蒙思想家・政治学者で初代東京大学総理、後に帝国大学総長となった加藤弘之の初期の代表的著作。天赋人權論の立場から、憲政の要領と必要性を簡潔明解に説明しており、立憲政治思想の移入・普及に大きな役割を果たした。「立憲政体」という語は本書で初めて用いられたもの。加藤自身は後に天赋人權説を棄てて社会進化論に「転向」し、官学の総帥として国権主義的政治理論を展開することになる。

14. 『畢洒林氏萬國公法』畢洒林説 西周助譯述 大阪 敦賀屋為七 慶應4 (1868)



幕府が文久2 (1862)年オランダへ派遣した留学生15名のうち、法律・政治学を修めたのは津田真一郎(真道)と西周助(周)であった。両名はライデン大学教授シモン・フィッセリング(Simon Vissering)に性法学・

万国公法学・国法学・経済学・政表学(統計学)を学び、筆記した講義ノートを帰国後に翻訳したが、本書はそのうちのひとつで、「万国公法」(Volkenrecht)とは国際法のこと。15. 『泰西国法論』、16. 『性法略』の両書とともに、体系的な西洋近代法学を初めて日本に紹介したものと見える。

15. 『泰西國法論』[シモン・ヒッセリング口述][出版地不明][出版者不明] 津田真一郎譯 [慶應4 (1868)]



フィッセリング講義ノートの一つ、Staatsrechtの翻訳。内容は公法学全般にわたっており、日本語で書かれた最初の西洋近代法学の概説書である。「法学」という語じたい、この書物で初めて採用されたもので

あるが、「民法」・「商法」・「物権」・「慣習法」などの法律用語もまた本書において津田が創案選定したものであり、西洋近代法の移入にきわめて重要な役割を果たした書物であったといえる。

16. 『性法略』[畢洒林著] 神田孟恪譯 紀伊國屋源兵衛 明治4 (1871)

西周助と津田真一郎が筆記したフィッセリングの講義ノートの一つ、Natuurregtの翻訳。西による訳稿「性法口訣」が慶応3 (1867)年に成っていたが亡失したため、かわって神田孝平が訳した。「性法」とは現在でいう自然法のこと、内容は西洋法の基本原則・諸種の権利について簡明に叙述した、いわば法学通論的なもの。当時の知識人にとって、自然法という普遍的規範の考え方は、朱子学的「理」の観念のアナロジーで理解するに容易であったと思われる。

17. 『佛蘭西法律書 民法』箕作麟祥口訳 辻士革筆受 大学南校 明治4 (1871)

フランス民法(ナポレオン民法典)の翻訳。箕作は慶応3 (1867)年徳川昭武に随行して渡仏した経験があるが、西洋近代市民法の中核ともいべき民法の概念は中国法的伝統には全くないものであったから、翻訳は困難を極めた。フランス法に基づく民法制定を急いだ江藤新平は「誤訳をも妨げず、唯速訳せよ」と命じたと伝えられ、箕作は「動産」・「不動産」・「相続」などの法律用語を選定しつつ翻訳を進めた。明治3 (1870)年から翌年にかけて、太政官制度局の民法編纂会議で箕作の訳したフランス民法を逐条審議したが、「droit civilが「民権」と訳されていたため、「民に権があるとは何ごとか」と議論になったことなどが伝えられている。

18. 『佛國刑法講義』[ボアソナード講義][名村泰蔵譯][司法省] 明治11 (1878)

フランスから招聘したボワソナード(Gustave Emile Boissonade de Fontarabie)は、旧刑法(明治13<1880>年)、治罪法(同)、旧民法(明治23<1890>年)など重要法典を起草し、司法省法学校などの法学教育に尽力したほか、法律・外交顧問として幅広く活動するなど日本の法の近代化に大きな足跡を残し、「日本近代法の父」とも呼ばれる。訳者名村泰蔵は蘭・英・仏・独語に通じ、慶応2 (1866)年徳川昭武に随行して渡仏、維新後も司法官となり渡欧し、明治6 (1873)年ボワソナードが来日する際にフランスから付き添ったのが名村であった。ボワソナードの講義の翻訳も多数あるが、本書は明治8 (1875)年9月25日から翌年4月8日まで32回にわたって行われた刑法講義の記録。

19. 『萬法精理』孟德斯鳩著 何禮之重譯 何禮之 明治8 (1875)
『萬法精理』孟德斯鳩著 何禮之重譯 何禮之 明治9 (1876)

モンテスキュー『法の精神』(初版1748年)の英訳本 *The Spirit of Laws* からの重訳。何礼之(1840-1923)は岩倉使節団に一等書記官として随行、米国ワシントンで当地の著名な法律家サミュエル・テイロル(Samuel Taylor)に泰西法律について質問したところ、本書を読むように勧められたという。箕作麟祥が明治7 (1874)年『明六雑誌』に英語版からの抄訳を載せており、フランス語版から訳した鈴木唯一『律例精義』第一巻(明治8年)も出たが、完訳は何礼之のものが初めてであった。和装・洋装の二種類がある。

資料No.	渡航者	渡航歴	史料名	所蔵
12			『亜墨利加國條約並稅則』28丁 26cm 『阿蘭陀國條約並稅則』26丁 26cm 『魯西亜國條約並稅則』25丁 26cm 『英吉利國條約並稅則』28丁 26cm 『佛蘭西國條約並稅則』27丁 26cm いずれも [菊屋幸三郎] 安政6 (1859) (和装)	中央準貴 329.19 N 岡谷文庫
13	加藤弘之		『立憲政體略』加藤弘蔵著 紀伊國屋源兵衛 慶応4小引 (1868) 2, 26丁 23cm (和装)	中央準貴 313.7 Ka 神宮皇學館文庫
14	西 周	文久2年幕府留学生 (蘭)	『畢洒林氏萬國公法』畢洒林説 西周助譯述 大阪 敦賀屋為七 慶應4 (1868) 4冊 25.4×17.9cm (和装)	中央準貴 329 V
15	津田真一郎	文久2年幕府留学生 (蘭)	『泰西國法論』[シモン・ヒッセリング口述] 津田真一郎譯 [出版地不明] [出版者不明] [慶應4 (1868)] 4冊 22×15.3cm (和装)	中央準貴 329 V
16	神田孝平		『性法略』[畢洒林著] 神田孟恪譯 紀伊國屋源兵衛 明治4 (1871) 8, 35丁 22cm (和装)	法 321.1 K999
17	箕作麟祥	慶応3年遣欧使節団	『佛蘭西法律書 民法』箕作麟祥口譯 辻士革筆受 大学南校 明治4 (1871) 16冊 26cm (和装)	法 322.429 F844
17-1	同上	同上	『佛蘭西法律書』[箕作麟祥譯] 大野堯運 報告社 (発売) 明治13 (1880) 2冊 19cm 上巻: 憲法、民法 下巻: 訴訟法、商法、治罪法、刑法	法 320.8 H759
18	名村泰蔵	同上	『佛國刑法講義』[ボアソナード講義] [名村泰蔵譯] [司法省] 明治11 (1878) 583p 20cm	法 326.8 B637
19	何 礼之	明治4年遣欧使節団書記官	『萬法精理』孟德斯鳩著 何禮之重譯 何禮之 明治8 (1875) 18冊 23cm (和装)	中央特形 322.9 Mo
19	同上	同上	『萬法精理』孟德斯鳩著 何禮之重譯 何禮之 明治9 (1876) 2冊 22cm	法 321.1 M765

展示史料5：明治岩倉遣欧使節団の記録

20. 『特命全權大使米歐回覧電記』久米邦武編 博聞社 1878.10

久米邦武 (1838-1916) は、明治4 (1871) 年に岩倉遣欧使節団に大使随行人として参加。本書は、久米と書記官の畠山義成が全行程で視察した記録を原本として、久米が編修したもので、10点の地図と300点以上の銅版画が挿入されている。初版の印刷は500部で、価格は4円50銭とし、実際には12月末に発売された。



21. 『岩倉公實記』上・中・下 岩倉公旧蹟保存会 1906.9

『大久保利通日記』上巻・下巻 日本史籍協會 1927.3-1927.4
『木戸孝允日記』第一・第二・第三 妻木忠太編纂 日本史籍協會 1932.12-1933.6

岩倉具視 (1825-1885) は、大使であり、大久保利通 (1830-1878) と木戸孝允 (1833-1877) は4人の副使の一人であった。『岩倉公實記』中 p.95以降、『大久保利通日記』下巻 p.19以降、『木戸孝允日記』第二 p.119以降に渡航時の記録が書かれている。

22. 『理事功程』田中不二磨著 雄松堂書店 1982.6

理事功程は、岩倉遣欧使節団に理事官として参加した官僚が、帰国後に上書進呈した報告書類である。本書は、文部省 明治5-8 (1872-1875) 年刊の復刻。文部省理事官であった田中が提出したものは、米国からロシアまで9か国の教育事情を15巻に纏めたもので、「我が国の近代学校の充実に対して参考になった点が極めて大きかった」との後の評価を得ている。田中不二磨 (1845-1909) は、もとは勤皇派の尾張藩士であり、明治維新後、新政府に出仕した人物である。のち、文部大輔から司法大臣まで勤めた。

資料No.	渡航者	渡航歴	史料名	所蔵
20	久米邦武	明治4年遣欧使節団 (随員)	『特命全權大使米歐回覧電記』久米邦武編 博聞社 1878.10 5冊 21cm	中央図 290.9 To
21	岩倉具視	明治4年遣欧使節団全權大使	『岩倉公實記』上・中・下 岩倉公旧蹟保存会 1906.9 3冊 26cm	中央図 210.58 I
21	大久保利通	明治4年遣欧使節団全權副使	『大久保利通日記』上巻・下巻 日本史籍協會 1927.3-1927.4 2冊 23cm	中央図 210.58 N
21	木戸孝允	明治4年遣欧使節団全權副使	『木戸孝允日記』第一・第二・第三 妻木忠太編纂 日本史籍協會 1932.12-1933.6 3冊 23cm	中央図 210.6 N
22	田中不二磨	明治4年遣欧使節団理事官	『理事功程』田中不二磨著 雄松堂書店 1982.6 15冊 22cm (和装) (明治初期教育稀観書集成 第3輯)	教育和書 370.8 Mei

展示史料6：西洋文化と産業・技術の紹介

23. 『増補和解西洋事情』 福澤諭吉編 黒田行次郎校正 [出版者不明] [1868]



福澤諭吉 (1835-1901) は、中津藩の出身。出府後、幕臣の家臣となる。万延元 (1860) 年渡米使節の従者として「咸臨丸」で渡米し、その後も文久2 (1862) 年の幕府派遣使節に参加した。『西洋事情』は、慶応2 (1866) 年に初編が刊行

された。西洋社会の制度や実態および理念などについての一般的な紹介に始まり、欧米主要国の歴史や当時の現状を伝え、当時のベストセラーとなった。

24. 『改暦辨』 福澤諭吉著 [明治年間]

明治政府は、明治5 (1872) 年11月、太陽暦 (グレゴリオ暦) への改暦を発表した。これによって明治6 (1873) 年から、太陰暦に代わり、現在使われている太陽暦が採用されることになったが、準備期間が短く、明治5年12月3日が新しい暦で明治6年1月1日になってしまった結果、国内は随分混乱したという。

福澤諭吉などの学者が、合理的な太陽暦を支持し、普及させるための書物を著したが、この『改暦辨』もそのうちのひとつ。

25. 『官版輿地誌略』 第1編巻三 内田正雄纂輯 川上寛模画辻 士革、市川清流校訂 [出版者不明] 1871?



内田正雄 (1838-1876) は、幕臣で長崎海軍伝習所などに在籍し、のち軍艦頭を務めた。

文久2 (1862) 年オランダ留学生として渡航し、船具、運用術、砲術などを学ぶ。幕府の購入した新造軍艦開陽丸で1867年に帰国した。維新後は開成所・文部

省に出仕し、辞職したのちは翻訳や著述に専念した。その代表作が『輿地誌略』といえる。教科書としても使われ多数出版された。

『輿地誌略』は、全4編 (13冊) の世界地誌書で、オランダで入手した地理書などを参考にしたと自著で述べている。福澤諭吉『学問ノススメ』、中村正直『西国立志編』と併せ「明治の三書」と称された。本学は巻三のみ所蔵。

26. 『新體詩抄 初編』 外山正一、矢田部良吉、井上哲次郎訳著 日本近代文学館 図書月販 (発売) 1971.5

外山正一 (1848-1900) は、開成所英学教授手伝出役のときに、慶応2 (1866) 年幕府派遣の英国留学生として渡英し、明治3 (1870) 年には、森有礼に随行して渡米もしている。明治21 (1888) 年には、文学博士を授与され、30 (1897) 年には東京帝国大学の総長となった。

『新體詩抄』は、創作詩5編、翻訳詩14編が収録されており、

欧化主義のもと、伝統的詩歌を排して、「新体ノ詩」を作り出そうとしたもので、日本近代詩の形成に影響を与えた。本書は、丸屋善七 明治15 (1882) 年8月刊の複製本である。

27. 『自由之理』 彌爾著 中村敬太郎譯 同人社 1872.2

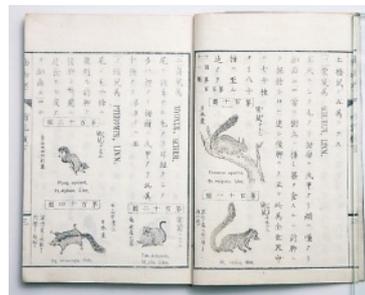
訳者の中村敬太郎 (1832-1891) は、明治時代の啓蒙学者で、後に中村正直と改名。慶応2 (1866) 年幕府イギリス留学生14名の一人で、取締として参加した。本書は、J.S.ミルが1859年に出版した *On Liberty* の1870年ロンドン出版本の翻訳本で、5巻6冊から成る。自由民権運動に大きな影響を与え、スマイルズ著『西国立志編』の訳書とともに明治期日本の青年達に新しい思想を紹介した。

28. 『彌爾經濟論』 初篇卷之1-初篇卷之5 [ミル著] 林董譯述 大野誠校正 島村利助 (發兌) [1876]

訳述した林董 (1850-1913) は、ジョセフ・ヒコヤヘボン博士夫人に英語を学び、慶応2 (1866) 年から、慶応4 (1868) 年にかけて幕府が派遣した英国留学生の一人である。帰国後、箱館戦争に参加して、禁固の処罰を受けるが、後、明治政府に出仕し、明治4 (1871) 年には、二等書記官として岩倉遣欧使節団に随行した。

本書は、J.S.ミルの『経済学原理』(初版は1848年刊) の邦訳で、明治時代に広く読まれた古典経済学の教科書である。

29. 『動物學』 初編上 哺乳類上、初編下 哺乳類下 ブロムメ著 田中芳男抄訳 中島仰山画 博物館 1874.11



田中芳男 (1838-1916) は、伊藤圭介に本草学を学ぶ。慶応3 (1867) 年パリ万博に参加した幕府の出品責任者として、遣仏使節団の随員となる。博物館の開設、博覧会の開催に関わり、田中町成とともに日本の博物館・博覧会の父と呼ばれる。本書は、動物図鑑と言えるもので、動物の分類階級や用語に用いた訳語は、現在用いられているものも多い。

30. 『薔薇栽培法：圖入』 サミュエル・パンソン著 安井真八郎訳 共由社 1875.9



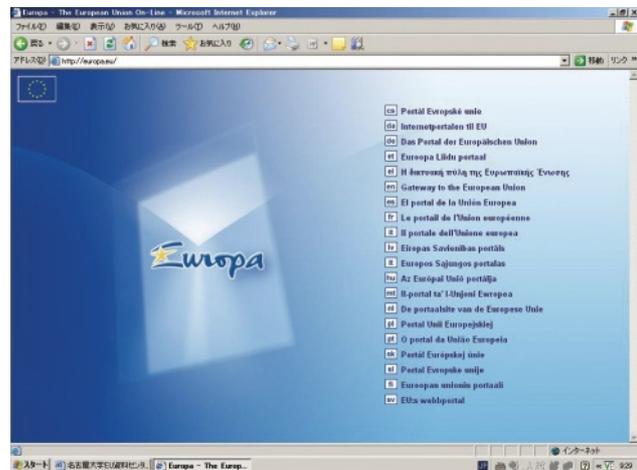
安井真八郎 (1847-?) は、慶応2 (1866) 年幕府英留学生であるが、帰国後静岡へ移住してからの消息は不明。本書は、日本におけるバラの栽培に関する最初の専門書のうちの1冊である。図は銅版。

資料No.	渡航者	渡航歴	史料名	所蔵
23	福沢諭吉	万延元年遣米使節団及び文久元年遣欧使節団	『増補和解西洋事情』 福澤諭吉編 黒田行次郎校正 [出版者不明] [1868] 4冊 19cm (和装)	中央準貴 302.3 H 岡谷文庫
24	福沢諭吉	同上	『改暦辨』 福澤諭吉著 慶応義塾 [明治年間] 11丁 23cm (和装)	中央準貴 449.3 H 神宮皇學館文庫
24-1			『太陽太陽陰曆対照表』 図書局編纂 内務省 明治7 (1874).10 1冊 22cm (和装)	中央準貴 449.8 To 神宮皇學館文庫
25	内田正雄	文久2年幕府留学生(蘭)	『官版輿地誌略』第1編巻三 内田正雄纂輯 川上 寛模画 辻 士革、市川清流校訂 [出版者不明] [1871?] 59丁 26cm (和装)	中央準貴 290.8 U 岡谷文庫
26	外山正一	慶応2年幕府留学生(英)及び明治3年森有礼に随行(米)	『新體詩抄 初編』外山正一、矢田部良吉、井上哲次郎訳著 日本近代文学館 図書月販(発売) 1971.5 1, 2, 2, 1, 1, 42丁 23cm (和装) (特選名著複製全集近代文学館)	中央特形 908.1 To
27	中村正直	慶応2年幕府留学生(英)	『自由之理』彌爾著 中村敬太郎譯 同人社 1872.2 6冊 23cm (和装)	中央特形 133.424 Z 別置
28	林 董	明治4年遣欧使節団書記官	『彌兒經濟論』初篇巻之1-初篇巻之5 [ミル著] 林董譯述 大野誠校正 島村利助(發兌) [1876] 6冊 19cm (和装)	中央特形 331.324 Mi
29	田中芳男	慶応3年幕府バリエ万国博覧会派遣	『動物學』初編上 哺乳類上、初編下 哺乳類下 プロムメ著 田中芳男抄訳 中島仰山画 博物館 1874.11 2冊 23cm (和装)	医分館 480 Br 史料室2
30	安井真八郎	慶応2年幕府留学生(英)	『薔薇栽培法：圖入』サミュエル・パンソン著 安井真八郎訳 共由社 1875.9 2冊 19cm (和装)	農 627.7 P 石井文庫

名古屋大学 EU 資料センター展示について

EU 資料センター(European Documentation Centre = EDC、11月から EU 情報センター(EU i) に名称変更)は、欧州連合(EU)の行政執行機関である欧州委員会(The European Commission)により設置された欧州統合関係文献の資料センターです。EU に関する理解浸透、調査・研究の支援を目的として、1963年以来、世界中に約500の EU 資料センターが指定されており、日本国内では19大学に設置されています。名古屋大学 EU 資料センターもそのひとつで、1973年に経済学部図書室に設置されました。

EU 資料センターには、ルクセンブルクにある欧州委員会出版局からさまざまな公式資料や広報資料が送られてきており、原則として設置年以降の出版物を所蔵しています。今回の展示会では、EU の主な出版物である EU の設立条約集、年次報告書、月例報告書、EU の官報である“OJ (Official Journal of the European Union) ”、欧州委員会が発行する COM Documents、欧州司法裁判所判例集、各種統計を展示しています。現在これらの出版物は多くのものが電子化されており、EU のサイト (<http://europa.eu>) で、各国語で閲覧することができます。



EU のポータルサイト“Europa”のトップページ

史料の電子版閲覧

展示史料以外で、国内の大学図書館や国立国会図書館で電子化されて、本文が公開されているものがあります。これらは、次の URL を参照してください。

「幕末・維新期の遣外使節と留学生達の記録 (Web 閲覧)」

<http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/event/tenji/2006seiyou/>

西洋の発見 一幕末・維新期の遣外使節と留学生達一 (2006.11.10~11.24)

主 催 名古屋大学附属図書館・同研究開発室

共 催 名古屋大学大学院法学研究科・同経済学研究科

編集・発行 〒464-8601 名古屋市中種区不老町 名古屋大学附属図書館 発行日 2006.11.10

TEL 052-789-3667 FAX 052-789-3693

<http://www.nul.nagoya-u.ac.jp>

© 2006 名古屋大学附属図書館